

# 2 訪ねて 米国野外博物館を

「たてもの園だより48号」でご報告したように、江戸東京たてもの園では、海外の野外博物館との連携を深める一環として、また、経年劣化の進んだ復元建造物「丸二商店」を修復する工事の実施にあたり、木造建造物の修復方針を検討するため、平成27年度に米国の野外博物館3施設を調査いたしました。今回は建造物の修復方法を中心にご紹介いたします。

## ルイジアナ州立大学 田園生活博物館 (写真1②)

ルイジアナ州の州都、バトンルーージュに位置するルイジアナ州立大学田園生活博物館は、州の歴史や生活の変遷を伝える建造物を移築・復元している野外博物館です。州内の建造物に限って移築している点は、東京都内の建造物を収蔵しているたてもの園に類似しています。ルイジアナ州は様々な出自の人々が集まり、それぞれが自国の文化を持ち込み、独自の生活様式が生まれ、建物にも影響を与えています。これらの建物では生活の情景も再現しており、州の歴史や文化を後世に伝えるものとして活用されています。



1 地面と床に空間を設けて通気を良くする

建造物の修復については、人の目に触れる部分には極力建築当時に用いられた材料を使用し、人目につかない部分には

現代の材料を使用しています。そして修復作業の結果、周囲との色の違いが見られる場合には修



2 防水シートが貼られた屋根

復箇所をまわりと合わせる、色合わせの作業を行っています。また修復時に取り外された旧材は保管し、同じ建物内で取り替え材として再利用しています。

ルイジアナ州は高温多湿な環境であるため、建物にはバルコニーを設けて日影を作る工夫をしたり、風の通りをよくするために高床にしたり、窓の配置を工夫するといった特徴が見られます。建物は「息ができる」という、湿気を抜くことが求められます。一時期、屋根の防水をより強化するために、屋根の下地にタールを塗った防水シートを貼っていました。これは当時よく用いられた手法でしたが、逆に屋根内部から湿気が抜けなくなりかえって傷みを早め、屋根を大がかりに修復するという、現代の手法が裏目となった事例となりました。2005年、ルイジアナ州はハリケーン・カトリーナに襲われ多くの家屋が被害を受けましたが、これらは現代的な工法のものが多かったようです。その後の復旧作業では、古くからの「息ができる」建物の良さが見直さ

れ、当館に移築された建物が大きな役割を果たしました。

## コロニアル・ ウィリアムズバーグ (写真3④)

ヴァージニア州ウィリアムズバーグにある歴史保存地区で、日本では飛騨高山の合掌造りの民家集落といった「伝統的建造物群保存地区」に相当するようなところ。米国の独立戦争が勃発した1775年に焦点をあてた施設で、英国による植民地時代の様子を今に伝える場所です。1790年以降に建てられた建物を解体し、植民地時代の建物を、建っていた場所に復元するという手法で町並みを再現しています。現在もその作業は進められており、発掘による成果や歴史資料による考証など、科学的な根拠に基づいて復元され、正確さを保つことを使命としています。

修復にあたっては、できる限り伝統的な工法を用いています。一時期、基礎と土台をポルトで緊結したところ、そのポルトのせいで基礎が傷んでしまい、こちらでも復元当時主流だった方法が逆効果、という事例がありました。

材料は新しいものと古いものを混用することはありません。古い材料は入手が困難ですが、米国内で入手が困難なものは、本国だった英国から調達するほか、

原産国から取り寄せています。また、レンガは当時の材料や製法を検証し、施設内に窯を製造し焼成したものを使用します。金具類なども施設内で製造したものを使用しています。修復後は、見る人に混乱を与えないための配慮として、周囲の材料と調和させるための色合わせを行っています。そして、取り外された古い部材などは保管し、併設する美術館で展示するなど活用しています。このほか、大工道具や部品についての記載がある書籍など、建築に関わる様々な資料を積極的に収集しており、それらを調査研究することで、伝統的な工法や材料を用いた復元や修復に反映させています。



3 州議会議事堂内部では、調度類のメンテナンスが行われていた

この施設にある建物の一部では、所有者が居住し続けていたり寄付者が使用しているものがあり、創建当初の設備を更しないよう工夫しながら暮らしているそうです。

ミシガン州ディアボンの、フォードモーターが本社を置く地に、1929年、エジソンが電球を発明してから50年が経ったのを機に開設しました。グリーンフィールド・ビレッジには全米各地から移築された建物83棟があるほか、蒸気機関車や「フォードT」などの乗り物もあり、日本「博物館明治村」に似た野外博物館です。1927〜28年に、フロリダ州フォートマイヤーズにあったトーマス・エジソンの研究所を移築したのに始まり、44年にフォードの生家を移築、このほか、ライト兄弟の生家や飛行機を開発していた自転車屋、作曲家のステイブン・フォスターの家、さらにはフォードの自動車工

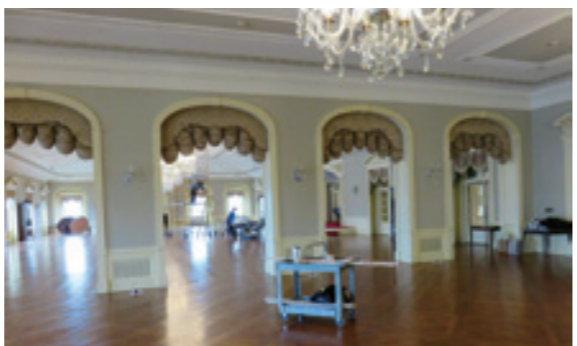
## ヘンリー・フォード博物館 グリーンフィールド・ビレッジ (写真5⑥)



4 レンガを焼成するための窯

場を1/4に縮小した建物などもあります。米国の文化史や科学史などで足跡を残した著名人の生家や関連施設が多数移築された施設です。

修復については、外から見える部分やオリジナルを保ちたい部分では伝統的な工法や材料を用い、見えない部分には現代の工法や材料を使用します。木材などは、



6 同じ敷地内にある「ラビットホール」ではメンテナンスが行われていた

同じ年代、同じ産地のものを使用することを心掛けています。そして現代のものを使用する際は、元の材料に影響を与えないかを検証した上で使用し、その箇所を撮影し記録します。また、ほかの建物で使用していた部材は基本的には転用し

ませんが、ドアノブやガラスなどは時々再利用することがあるようです。金物類などは新しく作ることが多く、館のボラティアの中には、このような金物類を製作する熱心な方がいるそうです。また鍵のように壊れやすいものや高いセキュリティが求められるものについては新しいものを使い、古色をかけています。このようにして修復した部分については、他の2施設と同様、周囲と違和感が出ないよう色合わせを行っています。

この施設では、積雪や低温による被害が発生することがあるようで、壁内部にある雨どいが、低温により樋内部の水が凍り膨張して壁を破損する、ということがあるそうです。

以上2回にわたり、米国の野外博物館での調査結果をご紹介いたしました。前年度の英国での調査結果も踏まえ、園内の建造物の修復に活かしていきます。なお、米国調査の詳細につきましては『東京江戸東京博物館紀要 第7号』に寄稿しましたので、こちらもあわせてご覧下さい。(学芸員 阿部由紀洋)